

日・朝・中の鳥竿習俗からみた弥生時代のシャーマニズム

萩原秀三郎[※]

西日本の諸神楽の中で、「將軍」という曲目が、二十番なり三十番なりで構成されている神楽のしめくくりにもなる重要な位置を与えられている。「將軍」は「弓將軍」「弓舞」ともいわれ、西都市銀鏡神楽では「莊嚴」と書かれる。これにはまだ神懸さえ残す例（広島市沼田町阿刀神楽）もあり、かつて託宣もあったと想定される。内容は弓祈禱を主としている^(註1)。

鹿児島県入来町の入来神舞（神楽）の祭文によると天大將軍，中大將軍，地大將軍の本地が誌されている^(註2)。以下，本文の一部を収録する。

將軍之祭文

將軍舞 弓ノ手マテ終テ弓ヲ餅ノ上ニ立テ曰ク

抑モ天大將軍ノ云レテ静カニ拜奉ニ事モ忝ナシ，唐土ヨリ丑寅ニ当リテ国有，国ノ名ヲユ井万国ト申シ，国ニ高サ八万由ジュン，廣サ八万由ジュンノ岩屋有リ，岩屋ニ池有リ，池ノ名ヲ峯チカ池ト申，池ニ島有リ，島ノ名ヲ金剛リキジカ岳ト申ス，島ニ木ニ有リ，木ノ名ヲ釈千段トキマサシカ木ト申シ彼ノ木ノ本ノ大キナルコトハ，七百五十年ニ廻リ給フ木ナリ，彼ノ木ノ枝ノサツシナルコトハ，三千大千世界ニ景ヲサシ，彼ノ木ノ第一ノ枝ニ日羽根ヲ休メ給フ，第二ノ枝ニ月羽根ヲ休メ給フ，第三ノ枝ニ天下ノ星ノ尊ノ羽根ヲ休メ給フ木ナリ，彼ノ木ノ元ニ御宮造リ岩根ノ大將軍トテ毎日朔日三日ヲ御縁日トシ玉フハ是コソ天大將軍ノ云レナリ。

(中略)

抑モ昔ハ月七ツ日七ツヲ以テ，日本ヲ照シ玉フ，鬼萬国ヨリスイト云フ鬼来テ，月六ツ日ツヲ吞ミ喰ヒ候，今日一ツ残りシヲ，是ヲ吞ミ喰ハンバ，日本ハ定夜ノ暗トナラントテ，大刀劔小刀劔ランバピランバワツトテ，五ツノ劔ヲ五方ニ投ケサセ給ヘバ，ホドナキスキト云鬼ノ首ヲ打チ，片眼ヲ取テハ今日ノ天大將軍ノ奉射ノ的ト表ス，片眼ヲ取テハ正月七日ノ御鏡ト表ス，面ノ皮ヲハイテハ三月三日ノ草ノ餅ト表ス，タフサヲ取テハ五月五日ノ粽ト表ス，ナツキヲ取テハ奈良ノ東大寺ノ鐘ト表ス，カラダヲ取テハ炭ニ焼シユミ頂上ニ置キ候得，ソ，五万風バツト吹き来テ山ニ吹入候得ハ，虎狼ト成テ人ヲ害ス，海ニ吹入候得ハ，鰐鯨シヤチ矛ト成テ人ヲ害ス，野ニ吹キ入候得ハ，アブカハチカト成テ人ヲ害ス，人ノ家ノ内ニ吹キ入レノ上ハ，ノミ床虫ト成テ人ヲ害ス，掛ル悪クウ

※民俗写真家（アジア民俗学）

深キ鬼ノ出入方ナレバ、是ヨリ丑寅ニ當テ、トウ針ノミニスワホトアキテ候、是二的ノ
貴方遊ソハレ候得。

たとえば天大將軍のいわれは、ある国に大きな岩屋があり、岩屋の中の鳥に三千世界に影を落
とす巨木があり、その木の枝のいちばん上の枝には太陽が羽根を休めて止まり、つぎの枝には、
月が羽根を休め、そして木の根方にはお宮を造って岩根の大將軍を祠っている、とある。

さらに、將軍が的のいわれを尋ねるくんだりでは、そもそも昔は太陽が七つ、月も七つもあった。
ところが巨大な鬼が太陽を六つ、月を六つ、呑みこんでしまった。もし残された太陽と月を呑み
こんでしまったら日本は常夜の国になってしまう。そこで、劍を投げて鬼の首を打った。太陽や
月を呑みこんだ巨大な鬼の死体から、両眼を取り、片眼を正月の奉射の的とし、片眼を鏡とした。
そのほか、体のそれぞれの部分からは万物が化生した、という。また、三宝荒神の祭文では、
荒神を鬼に見立て、荒神の左の目を以て日と現し、右の目を以て月と現したとある。

つまり、この祭文は、中国の天地創成神話・巨人盤古の死体化生モチーフ及び弓の名人羿によ
る十日のうち九つの太陽を射落す射日神話によるものであることは明らかである。かつて、新
潟県魚沼郡に点在する「十二山様」とよぶ山神祭について、鳥の脛を射るこの行事は、羿の射
日と無関係ではあるまいと、ネリー・ナウマンは指摘したが、この指摘に注目する人はいなかった
ように思う(註³)。

つぎに、山口県長府市 忌宮の奉射についてみることにする。昔、朝鮮に塵輪という悪鬼が
いて黒雲に乗って渡海、皇宮を侵そうとしたので天皇みずから弓矢を執って塵輪を射斃した。その
鬼の首を理めたのが、今もある「鬼石」で、正月の奉射の的は、その石のそばに東に向けて置か
れ、的には道教の八卦図に酷似した図を描き、陰矢陽矢の二本を射込む(註⁴)。

また、忌宮には数方庭と呼ぶ祭が、月遅れの盆の折りに行なわれる。この祭の由来では、塵輪
は鬼ではなく、三間四方の大鳥とされる。住吉大神がこれを一矢で射落したものの、怪鳥の崇り
で悪疫が流行、そこで大鳥の霊を鎮めるために数方庭の祭りをはじめたという。幟の先に大鳥を
象った鳥毛と小鈴をつけ、この幟を立てて鬼石をめぐるのである。

この数方庭は、朝鮮の部落祭のソッテに相当するとしたのは国分直一氏で、私もこの説に同意
する。ソッテの「ソッ」とは聳といった意味の形容詞に使われた古語で、「テ」は柱とか竿(杆)
など長い棒状のものを指す古語である。漢字をあてて「蘇塗」と表記される(註⁵)。

『魏志』東夷伝の「韓伝」馬韓条には、「蘇塗」というものがあり、大きな木が立てられ鈴鼓
を懸け、鬼神を祀ったとある。韓国のソッテは、村の人口や境、村の中などに立てられた長い棒
か石柱で、頂上には鳥の形をしたものが置かれる。集落の入口にソッテが立つ場合にはチャン
スンと呼ぶ天下大將軍、地天下將軍が立っている。

ソッテは、チャンスンを含む聖域全体を呼ぶ呼称であるほか、いわゆるソッテだけを指す場合
もあり、ふつう「スサルテ」という。スサルは目に見えない悪霊を意味する(註⁶)。スハウティ
の数方庭は明らかにあて字であり、スサルテがスハウティになった可能性は十分に認められよう。

ところで、古代朝鮮の始祖神話を伝える『三国遺事』高句麗条によると、始祖、朱蒙^{しゅもう}は、母柳花が日光感精^{かんげい}により生まれた「日の御子」であるとともに、はじめ母は卵を出産し、朱蒙はその卵の殻を割って生まれたといい、いわば「卵生」型の始祖である。朱蒙は若くして弓を善くし、弓の上手という意味で朱蒙と名づけられた。また『旧三国史』逸文によると、朱蒙は大樹の下で母の使者である鳩から麥種を授けられた。大樹の上の鳩を弓で射て喉を開いて麥種を得、その後鳩は蘇って飛び去った。

『豊後風土記』逸文によると、ある人が餅を的として射たところ、餅は白鳥となって飛び去り、以後その人の田の苗はみな枯れたとあり、鳥と穀霊との結びつきは深い。

大樹の頂の霊鳥は、ソッテ、つまり鳥竿と一般に呼称されるものにほかならず、朱蒙が弓の名手であることから弓を善くする英雄＝弓將軍をほうふつとさせる。朱蒙神話とソッテとを結びつけての考察は三品彰英や柳東植氏^{あきひで}(註⁷)にあるが、両者ともこの神話と祭式は鳥の形をとった神霊の降臨を物語るものとされ、その系譜は北方的天神降臨信仰に置かれた。三品は満州朝鮮地帯の古代的な祭儀様式の代表的なものが、この立竿信仰であるとした。

ところが、最近、中国の山東半島の南のつけ根に近い江蘇省淮陰市高庄の戦国墓から出土した随葬器物に鳥竿図と思われる図が発見された(註⁸)。この図の樹木も鳥も、他の器物に描かれる樹木や鳥とは明らかにちがって写実味にとぼしい。器物にはそれぞれ神話伝説の世界が描かれ、全体が呪術信仰に満ちている。

高庄戦国墓は、その出土物から戦国中期以後の楚国領域(西の秦に押されて楚の勢力が東に移った頃)のものと考えられており、少なくとも楚文化の形式を踏んでいることは明確とされている。

浙江省紹興市の坡塘三〇六号墓から出土した八角形の鳥トーテム柱をもつ銅屋明器^{めい}については、紹興がかつて呉の都だったこともあって呉文化の遺跡とする見解もあるが、銅屋内の裸身の人物が呉風の断髪的人物にまじり笙を吹き椎髻^{ついでい}と呼ばれる楚人と同じまげを結う人物が含まれること、寄せ棟造りの屋根の文様が楚文化に見られる模様に近いこと、高庄戦国墓同様、楚の勢力が東に伸びたころのものと考えられること、などから少なくとも楚文化の影響の濃い明器と考えられる(註⁹)。

実は、鳥霊信仰は龍蛇信仰とともに西南諸地域に共通してみられるものであるが、どちらかといえば楚の領域に鳥霊信仰、呉越の領域に龍蛇信仰が色濃いとされている。

現在の少数民族についていえば、楚国の原住民であったミャオ族にも、鳥と龍の信仰は共にあるものの、始祖神話は卵生神話と犬祖神話である。卵生神話にともなう立竿信仰はミャオ族一般にみられ、そのうち明らかに竿の先に鶴宇鳥^{じゅーい}を止まらせた鳥竿信仰も多い。ミャオ族の始祖姜央^{きょうおう}は鶴宇^{じゅーい}という名の鳥が温めた卵から生まれた。実は卵は鶴宇鳥の卵ではなく、ミャオ族が崇拜する神樹・楓香樹に生みつけられた蝶の卵で、蝶もまたミャオ族の信仰の対象になっているのである。

貴州省黔東南の上郎徳や広西省融水泰安のミャオ族など、いくつかのミャオ族地区では木彫の鶴宇鳥を頂においた木竿を芦笙場の中央に立て、これをめぐって踊る正月行事がある。また、黔

東南では鼓社節とよぶミャオ族の祖先を祀る大祭に、鶴宇鳥を旗に描く。さらに湖南省湘西の巫師は、冠の上に鶴宇鳥を置く。そして、ミャオ族の舞踊の服装そのものが頭上に羽飾りをし、羽人、つまり鳥装の人を意味した^(註10)。

かつての研究によれば、朝鮮半島の鳥竿習俗は、もっぱら祭天の儀礼として位置づけられている。神の来臨は、天空からの垂直的降臨とされ、鳥竿と木刻神像の類似が、満州・モンゴル・シベリヤに至る北方民俗に求められた。それは一つの流れであるには相違ないが、むしろ根源的なものは、中国古代・殷（商）の東夷文化にあって、一方は北上してシベリヤに至り、それがさらに朝鮮半島を南下する流れを生じただけでなく、古くは東夷文化に染まる山東半島より直接、遼東半島乃至は朝鮮半島西海岸へ伝播したと考える傾向になりつつある^(註11)。

林巳奈夫氏の研究によると、殷周時代の饗饗文^{とうてつもん}の原流は、河姆渡遺跡の太陽を左右から支える鳳凰のマークにあるという^(註12)。河姆渡は浙江省余姚県にある紀元前5千年ごろの稲作遺跡で、このころすでに太陽と鳥を結びつけた稲作儀礼があったという確証として有名である。鳳凰は想像上の瑞兆を示す鳥だが、原型は鶏とも考えられている。

殷王朝の説話として知られるのが、玄鳥（燕）がおとした卵による始祖卵生説話で、高句麗^{こうくり}の朱蒙の説話も明らかに殷の玄鳥説話の系列に属する^(註13)。殷族の玄鳥説話を特徴づける玄鳥、つまり燕は春分に渡ってくる鳥で、燕は男女の合する歌垣の季節を告げるものであり、歌垣は殷の聖地＝桑林とも関係が深い。桑林で子をはらむ説話が多いのである。

そして興味深いのは『春秋左氏伝』によると、鳥の名をもつ官職＝鳥官は曆の官であることである。玄鳥氏は分（春分・秋分）を司り、伯趙氏^{はくちやう}（百舌鳥）は至（夏至冬至）を司るとある。立春立夏を司るのが鶯の青鳥氏、立秋立夏を司るのが雉の丹鳥氏とある。

わが国ではコヨミは、もともと日読みから出たことばであり、日読みはまた日知りに相当し、聖にも通じていたといわれる。殷人は日々、生と死をくりかえす太陽をトすることで、コヨミをつくったのであり、殷の巫者は太陽を司祭し、奉ずる神は太陽の昇降を統御する神・舜であった。鳥と太陽の信仰を司る者が巫者であったのである。このことは『日本書紀』が、天照大神の御名として最初に記した「大日靈貴^{おおひるめいひち}」の用字そのものが、太陽をまつる女巫を意味したことに通じる^(註14)。

殷は種族的には「東夷」に属し、西方の周からは異端視されたが、南方的な要素も強く、その文化は後に楚に受け継がれる。一方、ソビエトの民族学者、シロゴゴロフは、殷族はツングース族であるとまでいい、ツングース系の文化との類似をいう^(註15)。たとえば射日神話の数多い分布や、シャーマンが太陽や月を表わす金属の板や鏡をその装束に吊すこと、鹿・鳥・樹木をセットとして崇拝する信仰、鳥竿の習俗が、シャーマニズムにみられることなどが挙げられる。しかし、これらの類似は殷文化の系譜をひく楚文化など中国文化の北方伝播を裏づけるものであることが、加藤九祚氏^{そう}などの研究で次第に明らかになりつつある^(註16)。

わが国でも近年続々と出土する弥生時代の鳥竿習俗や鳥装の人を証明する遺物に対する研究が盛んである。大阪府池上や鳥根県西川津などの鳥竿、奈良県橿原市^{かしはら}の坪井や天理市清水風あるい

は唐古・鍵などの出土土器絵画にみられる鳥装した司祭者がそれである。こうした鳥装の司祭者の役割については、金関^{ひろし}恕氏、春成^{ひでじ}秀爾氏はじめ考古学界では、穀霊を運ぶ鳥を招くとするのが一般である(註17)。つまり、稲作農耕文化の伝来とともに稲作技術、技術は呪術にはかならなかったとして、鳥装のシャーマニズム文化がわが国に持込まれたというのである。

私は、鳥霊信仰に穀霊信仰が重なることはもちろんだが、鳥霊信仰は、水稻耕作の出発点すでに太陽信仰との組み合わせがあったことからしても、鳥と太陽は切り離せないものとする。鳥霊信仰は季節や時を告げる霊鳥である限り、太陽や時間認識と切り離しては考えられない。

わが国の太陽と鳥についての伝承としては、神武東征の八咫鳥^{やたがらす}があり、これは太陽を思わせる金鷄(金の鶏)ともいわれる。法隆寺玉蟲厨子台座絵・須彌山図には赤い太陽の中に三本の鳥が、正倉院の弦楽器には太陽の中に三本足の鳳凰が描かれている。また『延喜式』治部省には「三足鳥(日之精也)」とあり、同書祝詞には、中国神話でいう太陽の鳥が樹上から飛び立つ扶桑の樹と、太陽の沈む虞淵(蒙谷ともいう)についての断片的記述がある。

太陽の宿る扶桑の樹は、太陽が大地の穴からこの高木をつたって昇降するものであり、高木こそ太陽の寄り坐す木であることを示唆するものだ。わが国でも太陽信仰は鳥と結びつくだけでなく、樹木と結びつき、シャーマニズムとも結びつく。私は、中国、朝鮮、日本のこれらの文化は、系統的につながるものと考えている。

岡田精司氏は『古事記』による高御産巢日神^{たがみむすび}の別名である高木神について、タカミムスビ=日の神とし、高木の神はヒモロギを立て日神を仰いだことによるという。同じ太陽神でも、女神アマテラスよりもタカミムスビの神の方が日神としては古い名称であり、タカミムスビは男神と考えられるとしている。さらに岡田氏は『日本書紀』にある日祀部は、おそらく巫女的な日祀(ヒノマツリ)奉仕者の系譜をひくもので、稲作儀礼的な太陽信仰にもとずく神事を司る祭官であろうとしている(註18)。

ここで太陽信仰と王権について一言加えておこう。王権の祭式には、日月の幢^{とう}や四神旗、儀器としての鏡(太陽)や七星剣、年号を改める改元など、宇宙的な意義のものが多く、帝王が宇宙を支配することを常に明確にしている。

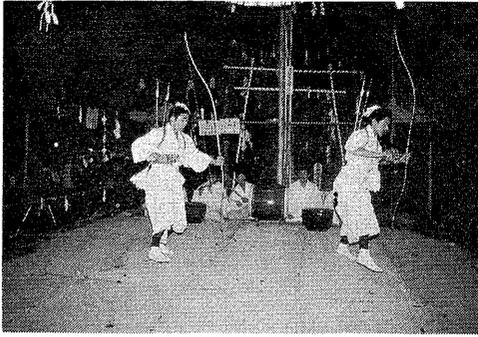
これらの王権祭祀の意図するものは、中国の天地創造神、女媧と伏羲がコンパスと定規といった規矩を用いて、混沌たる始源の宇宙で、天地を創造したことと比べられよう。祭式は王権祭祀に限らず、まず柱を立てることからはじめられるが、これは柱を立てることで混沌たる宇宙に中心が与えられ、あるいは東西の果てが示され、四方に境が区画され、秩序づけられることを意味する。太陽や月も、この柱をつたって天空へと放たれるのである。秩序ある理想的な天体の運行を願うのは、王者も非支配者もない、民族共通の願いであったのである。

最後に、柳田国男が、岡正雄の日本民族文化形成における五つの種族文化複合説を批判し、「私は今でも人種の混淆^{こんこう}ということを認めている。日本民族は単一民族が成長したものなどはいってない。ただ、種々の民族の参加はあったが、神霊觀念や死後の存在に関する“国有信仰”をもたらした最も重要な種族があり、彼等の主導により、“国有信仰”が今日に伝わったと考

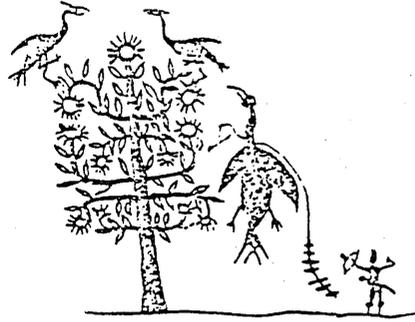
えているにすぎない」といったことに注目したい。柳田は、日本の“国有信仰”は、最初からまとまりのない雑駁な複合形ではなく、中核となるものがあり、その中核は稲作農耕民がもたらしたものである^(註19)。こうした柳田の、まず民族文化の核にあたるものを追及するという姿勢は、日本民族文化形成の単一民族、稲作一辺到説として誤解され退けられているのが現状であるが、もう一度考えなおしてみる必要がある。

写真・図版説明

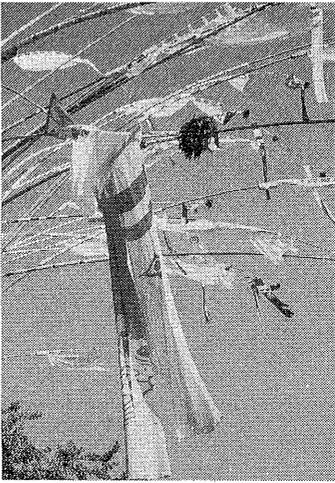
- ①西都市銀鏡神楽の荘厳
- ②射日神話（模写） 湖北省随県戦国曾侯乙墓出土の衣裳箱に描かれたもの。紀元前5世紀後半頃の楚墓とされ、樹上の鳥を弓（^{よくしや}弋射）で射落とす。樹枝には太陽が花のように描かれている。
- ③忌宮神社の数方庭 枝垂れた幟の先を撮ったもの。
- ④チャンスンとソッテ 韓国京畿道中部面ウムミ里 道の左右に天下大將軍，地下大將軍の神像が立ち，木の枝を利用した鳥竿⑤がその背後に立つ。
- ⑥石の鳥竿 韓国全羅北道扶安邑のもので，堂山と呼ばれ，小正月に綱引をしたあと石竿に綱を巻く。
- ⑦～⑩ 淮陰市博物館「淮陰高庄戦国墓」（『考古学報・2』1988年 科学出版社）より。⑦は鳥竿と思われるもの。⑧は『山海経』を思わせるような怪獣や樹木・鳥を描いたもの。⑨は田植。⑩は屋内で収穫の儀礼を行なっているのであろうか。太陽も描かれている。
- ⑪伎楽銅屋 浙江省紹興坡塘306号墓出土のもので，柱の上の鳥は大きな尾羽をもつ。
- ⑫～⑭ 貴州省黔東南・上郎徳の鳥竿。ふつう花杆と呼ばれ，芦笙場の中央に正月に立てて舞を舞う⑫。杆上に鶴宇鳥がとまっていたが破損し，現在型紙⑬をもとに修復中。⑭杆に水牛の角を象るものをつけ，そこに銅鼓をかけ叩く。杆の根元には太陽紋をモザイク状に小石で描く。
- ⑮広西チワン族自治区融水苗族の花杆。
- ⑯黔東南苗族の鼓社節で使用される旗に描かれた鶴宇鳥。
- ⑰ドルガン人の鳥竿。シベリヤの諸族はしばしば鳥の像をのせた神聖な柱を立てる。（ウノ・ハルヴァ『シャマニズム』三省堂1971年より）
- ⑱河姆渡遺跡出土の太陽を抱く双鳥。
- ⑲黔東南苗族の伝統的刺繍の図案。河姆渡の太陽を抱く双鳥の図柄とよく比較される。
- ⑳成都・漢画像磚に描かれる野合図。桑樹の下は巫者の祈禱の場であり，歌垣の場でもある。
- ㉑大阪府池上出土の弥生時代の鳥竿。長さ33.7cm。
- ㉒奈良県坪井出土の土器絵画。鳥の羽根を背にした司祭者。
- ㉓奈良県清水風遺跡出土の土器絵画。胸に聖なる鹿（鹿はよく聞き耳を立て予知能力があるとされる）を描いた司祭者。頭上に鳥毛をさしていると春成秀爾氏はみる。
- ㉔奈良県唐古・鍵遺跡出土の土器絵画。作図は辰巳和弘氏（『アメノウズメの古代学』『東アジアの古代文化』1991冬・66号）による。下図の一本線で表わされた両脚と，そのつけ根に描かれた女性器をもとに，清水風遺跡の鳥装の司祭者を参考に辰巳氏が復元した図像で，氏はアメノウズメの所作を想定している。



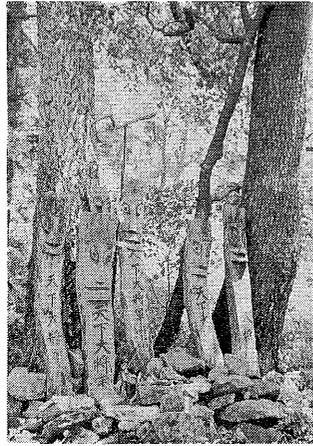
1.



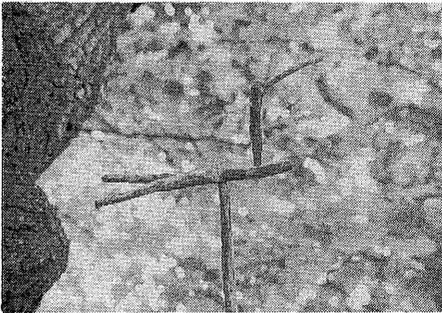
2.



3.



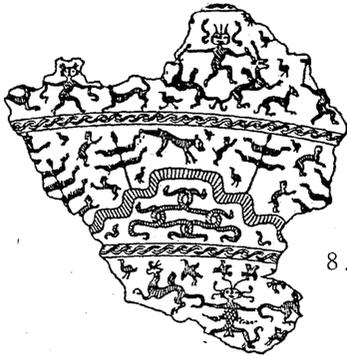
4.



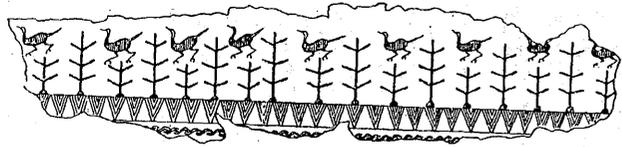
5.



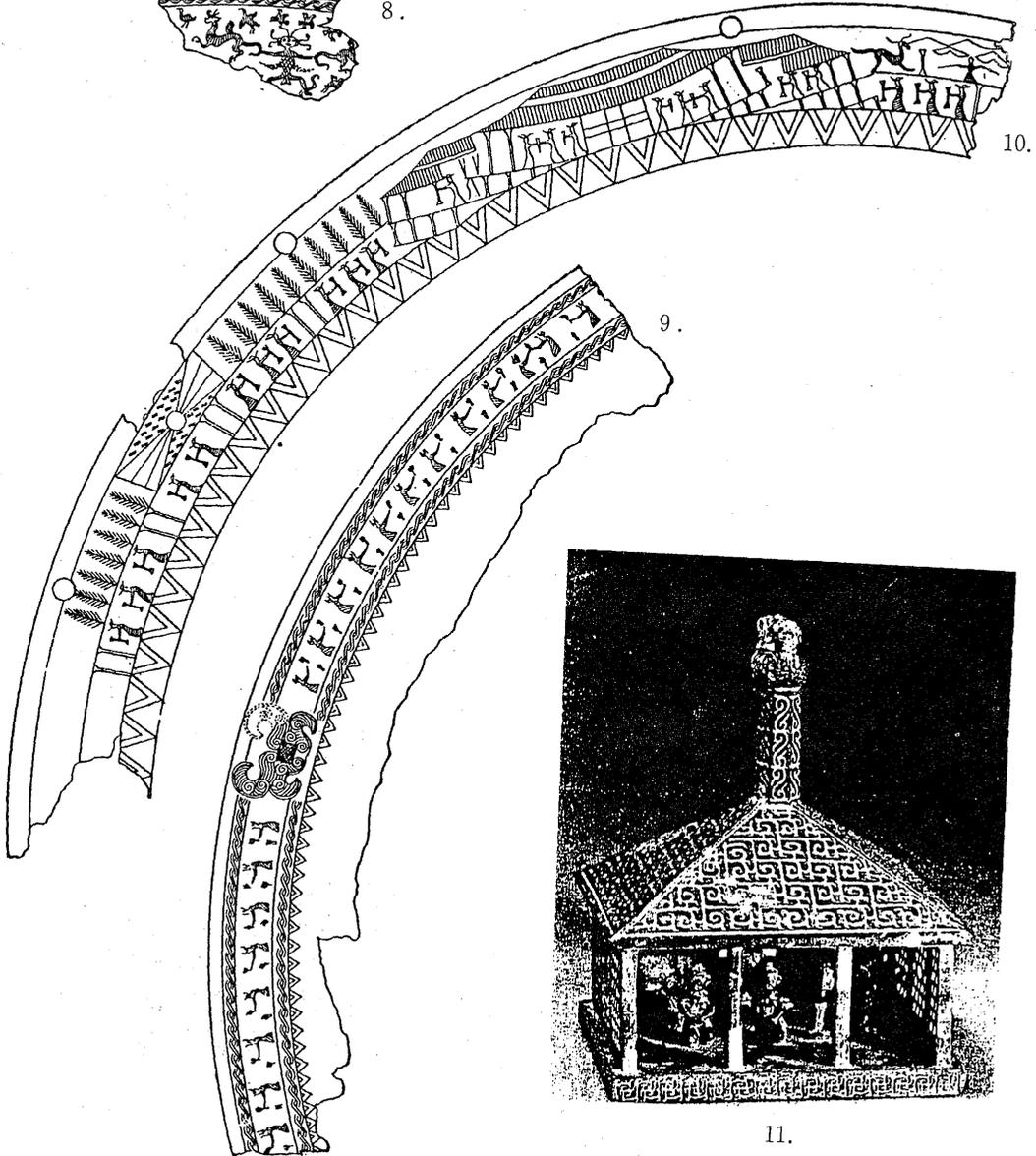
6.



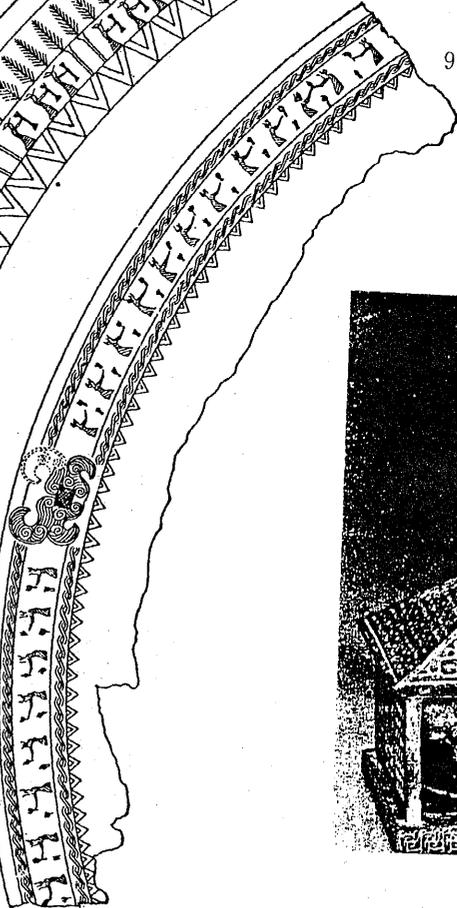
8.



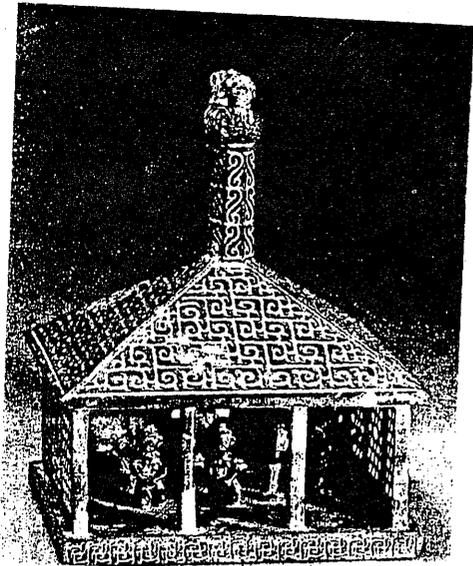
7.



10.



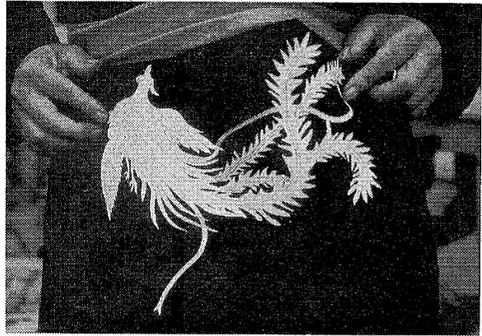
9.



11.



12.



13.



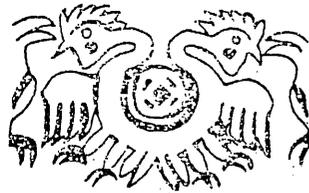
14.



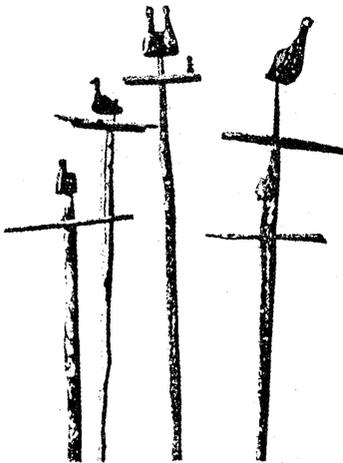
15.



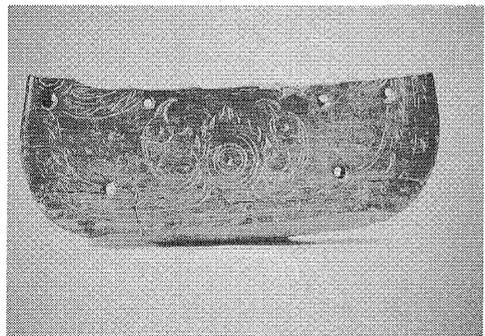
16.



18.



17.



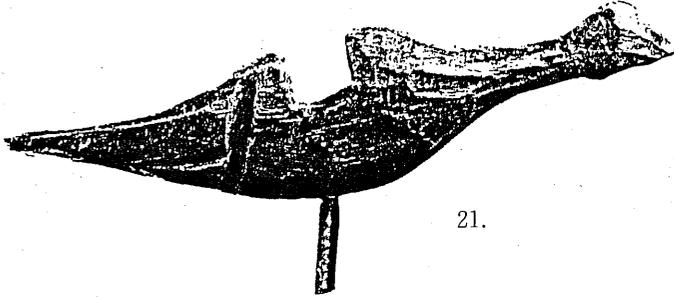
19.



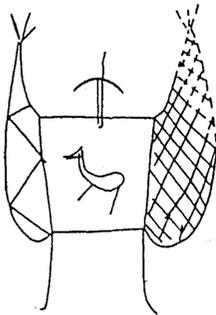
20.



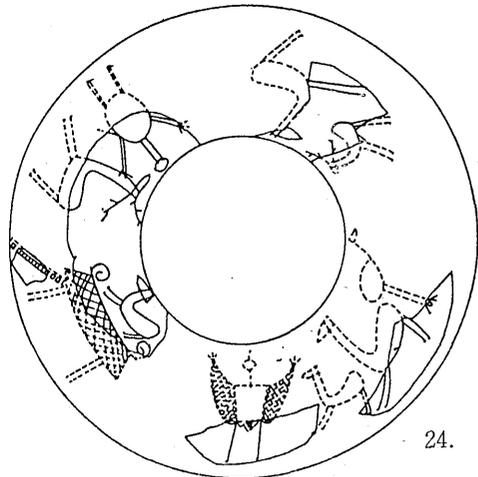
22.



21.



23.



24.

註

1. 石塚尊俊 『西日本諸神楽の研究』 慶友社 1982
2. 渡辺伸夫 「鹿児島県入来神舞資料」(『演劇研究 14』早大演劇博物館 1991)
3. 野村伸一 「山の神研究の現状」(『どるめん 12』 JICC 出版局 1977)
4. 宮崎義敬 『忌宮 長府祭事記』 忌宮神社 1984
5. 萩原秀三郎 崔仁鶴 『韓国の民俗』 第一法規 1974
6. 張籌根 『韓国の郷土信仰』 第一書房 1982
7. 三品彰英 『古代祭政と穀霊信仰 論文集 5』『増補 日鮮神話伝説の研究 論文集 4』 平凡社 1943・1944
8. 『考古学報』 1988 2期 科学出版社
9. 『文物』 1984 1期 文物出版社 楊鵬国 『苗族舞蹈と巫文化—苗族舞蹈の文化社会学考察—』 1990 貴州民族出版社
10. 楊鵬国 註9 参照
11. 蕭兵 『中国文化の精英—太陽英雄神話比較研究—』 1989 上海文芸出版社
12. 林己奈夫 「所謂饗饗紋は何を表はしたのか」 (『東方学報』第56冊 1984)
13. 白川静 『中国の神話』 1979 中央公論社
14. 上田正昭 『日本神話を考える』 1991 小学館
15. 白川静 1979 参照
16. 加藤九祚 「サルマタイの工芸とその周辺」 (『南ロシア騎馬民族の遺宝展』カタログ 1991 朝日新聞) ほか。
17. 金関恕 「古代祭式の源流」 (中西進『古代の祭式と思想—東アジアの中の日本—』 1991 角川選書214)
春成秀爾 「銅鐸から前方後円墳へ」 (『日本文化の源流』 1988 学生社)
18. 岡田精司 『古代王権の祭祀と神話』 1940 塙書房
19. 岩田重則 「岡学説・騎馬民族説再考」 (『日本民俗学』183』 1990)